外交官・大鳥圭介の東アジア外交認識

――対清国認識を中心に――

中村凌太郎

はじめに

明治二二年の駐清公使を経て、明治二七年に駐朝公使を兼任し、正に日清戦争前夜に活躍した外交官・大鳥圭介は、多くの日清戦争研究史の中で注目が成されてきた。

しかし一方で、その大鳥が、自らが相対することとなった東アジアの国々に対しどのような外交認識を持っていたのかという部分は、未だ不明瞭な部分が多い。

実際に海外各国へ派遣され、現地へ駐在した外交官たちが日本と当国との外交関係の在り方についてどのように捉え、志向したのかという外交論に関する側面は外交官個人を取り扱った研究で分析されているものの、その対象は主に青木周蔵、陸奥宗光など、現場の公使を経て外務大臣に就任した人間たちやまた薩摩藩英国留学生出身外交官の鮫島尚信や森有礼による、欧米各国との条約改正事業で活躍した外交官たちである。(1)

また東アジアと日本との関係性の在り方を巡っては、こちらも政府・在野問わず、様々な言説が存在し、特に従来の研究では、アジア主義に関する分析も多数行われている。(2)

しかし、当該期に対東アジア外交で活躍した外交官たちの外交論に関しての言及は、非常に少ない。三代目駐清公使である森有礼と四代目駐清公使である榎本武揚についてはそれぞれ分析がなされているものの、前者は、日清関係の在り方への言及というよりも日本と東アジアとの関係性に政府方針の西洋列強を中心とした万国公法システムへの参入を図ったことを検証しており、後者は、アジア主義の文脈から検討を行ったものである。(3)

当該期の日本と隣国である清国・朝鮮への外交論をアジア主義のようなイデオロギーからの側面のみではなく総体的に捉える上で、実際に日本の全権として両国の関係性の構築の使命を帯び、そして同国政府の状況を強く肌身に感じながら現地に駐在した経験を有する外交官を対象とすることは、一定の意義が存在すると思われる。

そこで、本論では以上の問題関心の下、大鳥圭介を取り上げ、彼の外交認識について検討していきたい。

では何故、大鳥を本論で事例として取り上げるのか。それは大鳥という人物の経歴の特殊性にある。

まず大鳥自身は外務省の生え抜きの官僚ではなく外交官一筋のキャリアを経たわけでもない当該期の自由任用制度下で抜擢された外部組の公使であり、また公使在任の時期も駐清・朝公使としての五年という短期間であった。確かに大鳥が前者の森や榎本と比較した時に実際に外交実務に携わった時期は短い。結果として外交官としての大鳥の思想と行動に注目した研究は、ほとんどない。

しかし、大鳥の経歴の特殊性は、公使就任の数十年前である明治十年代から解任後の明治三〇年代という長年に渡り東アジアと日本との外交関係の在り方に対し強い問題関心を持っていた人物であったということである。

大鳥は本来、技術者または洋学者であり、外交とは無縁の立ち位置にいた人物であった。実際に維新後の大鳥は工部省工部技監等の技術官僚、その後は学習院長等と教育者としての道を歩み、彼のポテンシャルを活かすキャリアを経ている。従来の研究では駐朝公使という大鳥が正に外交官として最も活躍した時期にフィーチャーされた結果、その前段階の駐清公使時代は勿論、工部省時代、そして公使解任後の時期の大鳥と東アジアとの関わりが自ずと見落とされてきたといえよう。

ある一つの国、地域に対し長期間に渡り関心を持ち注視していたという側面は当該期の多くの外交官の中でも稀有な部分である。よって、本論で当該期の対東アジア外交で活躍した外交官の代表として大鳥を取り上げる意義があると言えよう。

そして大鳥圭介に関する研究は、評伝を除くと数える程しか存在せず、多くは戊辰戦争期の部分に注目したもので、明治期以降になると尚更、その傾向が顕著に見られる。[4] ただし日清戦争研究史の文脈の中では、主に高橋秀直氏や原田敬一氏等から大鳥が駐朝公使として日清開戦外交を指導し、活躍した外交官として評価がなされていることは著名であろう。[5]

また近年、注目すべき研究としては邱帆氏が駐清公使時代とその就任前の大鳥を分析しアジア主義者という文脈から評価を行っている。[6] ただし同氏は大鳥を興亜会の一員と見做しているが、大鳥の名前は「興亜会々姓名録」、「亜細亜協会在京会員名簿」になく、また明治一三年の会同で陸軍省の暹羅出張で見聞した同国の事情について講演した他は、同会の会同及び催しの出席者にも彼の名前は見受けられないなど、その事実認識にはいくつか疑問がある。またアジア主義者という評価に対しても、日清提携論による西洋への対抗を提唱してこそいたが、それもごく短期間であり、彼を生涯にわたるアジア主義者として位置づけることには、これもまた疑問を感じざるを得ない。

以上の研究は前述したように、あくまでも一時期の外交官としての大鳥の姿を描いたに過ぎず、駐朝公使時代の数年間以外の彼の東アジア認識を総体として把握したものは皆無といってよいのである。駐朝公使という画期だけではなく、その前後の時期の彼の東アジアに対する外交認識を長いタイムスパンから分析することによって、前述した開戦外交を指揮した大鳥とはまた異なる彼の姿が見えてくるのではないだろうか。

そして本論では、大鳥の対清国認識を中心に分析を行っていきたい。後述するが従来の日清戦争史研究の中で駐朝公使時代の大鳥への分析は多々行われているものの、彼の外交官としてのキャリアのスタートであった駐清公使時代への分析はほとんど行われておらず、自ずと彼の対清国観についても不明瞭な部分が多い。しかし、当該期の日本にとって清国は強大な隣国であり、また同じ隣国の朝鮮は清国の強い影響下にあったことを踏まえると、清国との関係性の構築は東アジア地域での日本の在り方を規定する上で非常に重要であったことは言うまでもないであろう。前述したように大鳥は、半生に渡り東アジアと日本との関係性に強い関心を払い、外交官をはじめ様々な形で清国と関わった。その大鳥の清国認識を総体として読み解くことは、当該期の日清間の外交関係について再検討するための新しい視座を与えてくれるものと考えている。

以下、第一章では公使就任前、第二章では駐清公使時代、第三章では公使解任後と区分し、それぞれの時期の大鳥の清国に関する論稿等から彼の外交認識を検討していきたい。

一　公使就任前の大鳥の対清国認識―「清国論」を中心に―

従来、維新後の大鳥圭介は工部省の技術官僚としての側面も注目されてきた。しかし同時に当該期、大鳥が強い関心を寄せていたのは、日本の工業化だけでなく隣国である清国と朝鮮といった東アジア地域と日本との関係性にもあった。

朝鮮に対しては、大鳥は明治一五年、日本の殖産興業視察に来日した朝鮮の開化派官僚たちと面会した際に彼らを自宅へも招き、互いに腹を割って語り合い、同国に対し、以下のような積極的な認識を示している。

小生儀は兼て近来渡来せしもの丶内、趙秉嘉、洪英植、魚允中、又金宏集、金鏞元等と申人とも幾回も面会、拙宅へも尋参り心底を打明物語致し候廉も有之候。且従今彼国之頭目たる人を導き政路を改良せしむるには、必政略のみを用いず、誠意誠心を以てし、或は工業或は農事を教へて遍々に彼の心情之方向を変化せしめ、数々之事より徐々に暁し緩々の心服せしむる事、実に大切之ことかと被存候。(7)

彼は日本が朝鮮に対して政略だけではなく、誠意をもって農業や工業について教育することで、朝鮮人たちがやがては心から自分たちに服従してくれるとの見解を示し、「其辺之事に至り候ては小生敢て他人に譲らず」との自信も見せている。後に彼は駐朝公使として当国の内政改革に深く関わることになるわけだが、その何十年も前に既に日本が主体となり、如何にして朝鮮の内政を改良していくべきかというある種のビジョンを有していたことが窺える。

そして大鳥は同年、外務卿の井上馨に対し、空位となった駐朝公使への就任も打診している。

一昨日高輪御別荘へ相伺、今朝又御官宅へ伺候之處、何連も御不在中ニて不得拝顔遺憾之至奉存、猶今朝も拝趨之處御都合も如何と奉存候間（中略）右内願一条ハ別儀ニあらず今般花房公使他ニ転じ折ニ朝鮮公使御撰挙も可有之趣、伝聞真偽之程ハ細旨承知不致候得共、若し事実に候ハバ小生儀御諒不厚ニ候共、御配慮を以て一層之力を以て寸分を尽し申度考に御座候。不及彼ニハ可有之候得共拝命の上は畢生之憤発両国之交際貫徹いたし度と頻に精神を悩し申早候一両日前吉田大輔殿へも委敷心事拝朝拝語仕置申候。猶御聞取之上可然御諒察奉存候。多少之心事迚も筆頭ニハ難尽、御沙汰次第拝趨逐一奉申上度候。(8)

大鳥は、当時の公使・花房義質の転任を受けて、井上にその後任を自薦した。またこの書簡からは、彼が何度も井上を訪ね、本人との談義を試みていたことや、朝鮮での公使の職務への強い決意を示していたことがわかる。更には、外務大輔（次官）の吉田清成へも、既に自身の駐朝公使就任の希望について話しており、諸方面に運動を進めていたことも窺える。この時、大鳥は工部大学校校長という重役にあったにも関わらず、駐朝公使の職務に対し、並々ならぬ熱意を見せていた。また単に公使のポストを嘱望したのではなく、わざわざ駐朝公使として指定したのも同国ひいては東アジアを特別視していた表れと言えよう。

では、もう一つの隣国かつ大国であった清国についてはどのような

認識を有していたのだろうか。それが明治一五年の十月に大鳥が書き綴った「清国論」から読み取れる。

この清国論は大鳥が当時の日清関係を踏まえて、清国の脅威を語り、清国を仮想敵国として想定した策を具体的にいくつも講じており、政府に対して今後の日清関係はどうあるべきか意見を述べたものになっている。

ちなみにこの論稿は、国立国会図書館憲政資料室ではなく、大鳥が別荘を構えた神奈川県小田原市の市立中央図書館に子孫によって寄贈されたものである。小田原大海嘯で倒壊した別荘内から使用人が見つけ、回収したという従来の研究の中では、管見の限り使用されたことのない大鳥圭介関係史料である。また大鳥はこの論稿を十年以上も手元に置いていたことから、当論稿への彼の思い入れの強さが窺えるであろう。

まず冒頭で、大鳥は以下のような外交見解を政府へ示している。

近今我公国ノ外邦ニ対スル交際ニ親睦を加へ、蓋平和ヲ表シ、相率ヒテ昔ニ前進スルノ気運ニ当リ、我政府ノ注目請視スベキモノハ、隣邦清国ノ形勢ナリ。

維新ハ未ダ遠方異域ナル欧米ノ政度文物ヲ忖度シ、我国体ヲ改良スルニ、孜々トシテ近棲同父ナ清国ノ政略風俗ヲ考求シテ、数千年来ノ情交ヲ終ムルニ遅々タリシ[9]

つまり、政府が注目せねばならないのは西欧列強ではなく隣国の清国であるとし、「夫レ清国ハ坤輿ノ巨封ニテ地面九十万方里、人口三億万余、租税ニ億万銀円、陸軍二十四旗兵丁八十万軍艦十隻、百般ノ物産ニ富ミ、都鄙富家商饒多ク、一トテ我邦ノ企及所ニ非ズ」と清国の人口や経済等が日本よりも遥かに勝っていることを強調し、「故ニ友トシテ之ト交ルトキハ、我通商ノ利日ヲ遂テ増殖、実ニ天下ノ益友ナリ。又敵トシテコレニ対スルトキハ、兵馬衆多沃シテ軽侮スベカラズ。是畏ルベキ一強敵ナリ」と日清関係の在り方を評している。

つまり平時の際は隣国かつ大国である清国との通商関係の進展による日本の利益の増大を図ることが出来ると評価しながらも、有事の際は同国を軽視することなくむしろ日本にとって大きな脅威であるとの認識を示した。

そこで大鳥は、今、政府が取り組むべき急務として、清国についての様々な事柄を調べ上げるべきだとしている。

該国全域ノ地理、近今ノ歴史、人種、人口、各港ノ地勢、出入ノ物貨、内地ノ風俗、各省ノ人情、農商ノ盛衰、工業ノ進歩、運輸ノ通塞、海陸両軍編制、外交ノ規則等、一々之ヲ明ニシテ以テ政府ノ方略人身ノ向背ヲ伺視シ、友トナリテハ治ニ処シ、敵トナリテ乱ニ処スルノ業策ヲ未然ニ定メ、古ヲ省ミ、今ヲ視、更ニ将来ヲ察スル事、実ニ国家至上ノ急務ナリ。[10]

清国の地理や人種、産業といった基本情報から、陸海軍の軍備や外交の規則までを調べ上げ、平時有事に合わせ事前に策を考えることが国家の急務と述べている。またそれに加え、大鳥は、「因テ今般内閣又ハ参事院中ニ一局ヲ置カレ、数名ノ委員ヲ撰ビ、能ク清国ノ状態ヲ審ニシ、以テ平時ハ国益ノ道ヲ開キ、変ニ應ジテハ臨機ノ良策アラム事ヲ希フノミ」として、政府に対し清国調査並に対応のための部局を設置するようにとの要望も出している。

更には、日本人の多くが、中国人のことを「卑テ頑陋ト為シ、惰弱ト為ス」として見下しているが、それを「大ナル誤見」であると述べる。「我兵素ヨリ勇敢善戦フ事疑ナシト雖、彼国人多ク、財富ミ、殊ニ持臺ノ策ニ長ズ」と両国の人口や財源の違いからの兵力の差があることを指摘し、「苟モ、軽侮ノ念ヲ生ジ、彼与シ易シ、我勝利スベシ

等倨傲自居ルハ甚危シ。夫ノ畏ルベキヲ畏レ、戒ムベキヲ戒メ、之ニ備エ之ヲ待テ」と軍事の部分で清国と張り合うためにもその軍備の状況を把握するべきであると警告する。

更には、清国の急激な近代化についても以下のように言及している。

近年、彼国自製ノ船舶数十隻アリ。少年ノ才俊ヲ撰シ、出デテ海外ニ遣ワシ、或ハ鑛山ヲ開キ、或イハ電線ヲ架シ、風気徐々ニ開ケ、工商日々ニ進ムノ勢アリ。其鉄道ヲ布リモ、亦太遠キニ非ザルベシ。後今十年ノ後、国運ノ進歩、果テ如何ゾヤ。我有志者ノ目ヲ刮テ待ツベキモノナリ。[11]

大鳥は、清国が日本と同じく優秀な若者を海外へ留学させ、鉱山開発や電線の設置といったインフラ整備も進んできていることを事例に挙げ、日に日に近代化していく清国の状況を受けて、認識を改めるべきことを訴えているのである。

そして大鳥は、日清間の政治外交面での関係性については、日清の同盟による欧米諸国への対抗に理解を示しつつも、以下の見解を示した。

又日清ノ交際ハ亜細亜全局ノ興廃即所謂東方論ニ関シ事極メテ大ナリ得失痛痒ヲ同ジ唇歯相助ケ輔車相依リ兄トナリ弟トナリ連衡シテ以テ外寇ヲ禦クハ天理ニ従ヒ人情ニ応スル美事ナレハ共ニ希望スベキコトナレドモ若シ不幸ニモ二邦□間ニ瑕釁ヲ生シ調停スベカラザルニ至ルトキハ我素ヨリ譲ラズ彼モ亦執テ動カズ然ルトキハ唇歯ノ交輔車ノ義モ亦顧ルニ遑アラズ故ニ事ノ大小軽重ヲ視テ合従ヲ変シテ頡頏ト為シ得失ノ枢機ヲ誤ラザルハ当路者ノ知略雄断ニ存スルナリ之ヲ約言スレハ比隣ノ二邦相結ンテ外敵ニ当ルハ理ニ於テ当然ノ事ナレドモ二邦ノ間ニ事起ルトキ互ニ相譲リテ平和ヲ謀ルハ到底行レ難キコトニテ帰スル所我ハ我ガ所為ヲ為シテ已ムノミ[12]

大鳥は、日清間で何か有事が起きた際の互いに譲歩した平和的解決は、現実上不可能として、結局は日本一国での問題対処は止むを得ないと述べている。彼自身はアジア主義には否定的な立場を採った。

政府が西洋列強との条約改正に苦心し労力を割いていた中で、大鳥は清国の脅威を説き、こちらの問題にも注力すべきであると警鐘を鳴らした。また日清両国の関係性については商業面での結びつきについては積極的な姿勢を見せたものの、政治面では同国への脅威論と不信感を示し、両国の関係性には否定的な見解を出した。

以上の点から、大鳥が工部省の技術官僚時代から既に日清関係を国家の重要問題と位置付けていたことが見受けられる。本史料からは彼が常日頃から、様々な観点から清国の情勢を観察し、独自に具体的かつ現実的な対清外交戦略を構想し、清国に警戒を強めていたことが窺える。

そして、前節での朝鮮開化派官僚との邂逅、次期駐朝公使就任自薦は奇しくもこの清国論を綴った時期と同年であり、そのような意味では、大鳥の生涯の中でこの明治一五年は国内から海外―東アジア―へその視線を向けるようになったという大きなターニングポイントとして捉えられるであろう。

その後、明治二二年に大鳥は当時の駐日清国公使であった黎庶昌との意見交換会の冒頭に於いて彼から「其平日関心東方大局、衆所共知」[13]と日頃から東洋の情勢に関心があるのは多くの人々が知っているとの言葉をかけられている。これは多少の社交辞令としての意味合いが含まれていることは留意する必要があるが、少なくとも日本駐箚公使である黎から大鳥は国内で東アジア情勢に通じた人物であるとの評

価が成されていたことが読み取れよう。前節の内容も含め、大鳥が自身の職務とは別に日清朝の三国の関係性に対し強い問題関心を有していた。更にそこから清国に対しては様々な利害得失の側面を考慮し、そこで西洋列強ではなく、同国との関係の重要性を認識し訴えた人物であったと言えよう。

二　駐清公使時代の対清国認識とその転換―「蔵輝論」を中心に―

明治二二年五月、当時の駐清公使の塩田三郎が客死し、その数週間後に、急遽後任として大鳥が駐清公使へと任命された。同月、大鳥は榎本より「China 一条にて、此頃内閣に於て色々評議有之、右候補も数人御座候趣之処、大隈・伊藤抔之説は小生方に傾居候由」[14]との報を受けており、これは大隈から榎本に彼の駐清公使就任の意向を確認するようにとの言伝であった。そして、そのまま滞りなく次期駐清公使人事は進んだ。

冒頭で述べたように駐朝公使時代の大鳥は日清戦争史の文脈で多く言及されているも、従来の研究の中でその前段階の時期であった駐清公使時代の大鳥はほとんど検討がされてこなかった[15]。本章では主に駐清公使時代の大鳥の清国への認識と現地での彼の行動について分析を行っていく。

まず清国赴任から約半年後の明治二三年、大鳥は青木周蔵外相に対し以下の意見を上申している。

朝鮮国と当国の間に於る政略上并に通商上の関係は事の細大を問はす実に親密微妙の者にて其影響の感応は瞬間も等閑に付すへからす之に当る両公使の方略は同体一律に出てさるへからす候處以前は兎角双方気脈の貫徹不宣由因て本使赴任後不取敢近藤代理公使へ巨細及通牒候趣は昨年十二月付第十七号公信副書を以て申進置候（中略）近来種々錯雑の事情紛起の折柄彼圏内外の関係猶一層精密迅速の通報を要し候儀に御座候[16]

大鳥は、清国と朝鮮の政略・通商関係は大小に関わらず、その影響は軽視してはならないとして、精密、迅速に現地の状況を駐朝公使より報告してもらうように取り計らってほしいと駐清・朝公使の連携強化の要請を上申した。彼が駐清公使でありながらも積極的に朝鮮の状況を詳細に把握しようとしていたことが窺える。尚、その後、大鳥の上申を受けて、青木から近藤真鋤代理公使らに対し「朝鮮事情ニ付北京公使館へ通報方ノ儀訓令ノ件」として通告が成された[17]。

しかし、大鳥はなぜ外務大臣にわざわざ上申するほど当時の朝鮮の状況を詳細に知りたがったのか。確かにこの年は、日朝間において防穀令事件の交渉中ではあったものの特段、両国間では大きな動きはなかった。だが朝鮮国内では、貧農下層民の増大や窮乏化を背景に農民一揆が激化[18]、またその朝鮮の恐慌状況を清国が注視しているというきな臭い状況があった。

最も本邦の為患べくは、同叟の朝鮮に対する圧制策にて鮮王並びに有司はご承知の通り、更に自治の定見これ無く、国民は彼の撤桟一見等他事窘迫の時に際し、四方に紛起、靖定の模様これ無く、老鷲は兼て心算を按し、好時期到来遠からず、一唾手攻扼の勢、実に危険岌々無比上形勢にござ候。此儀に付、先ごろ愚衷十分に建言致しおき、かつ万一危難の時に臨み候節は、神州の為及ばずながら微力を尽くし候覚悟にござ候[19]

大鳥は、李鴻章らが朝鮮国内の混乱状態を注視しこれに乗じ朝鮮を飲み込むのではないかという強い疑念を持ち、情勢はこの上なく危険

極まりない状況であると清国への強い警戒を示していた。前節で朝鮮の状況を詳細に知りたがったのは「種々錯雑の事情紛起の折柄」と評したように、混乱した情勢下にあった朝鮮への清国側の不穏な動きを受けての行動であったと考えられる。

しかし、公使就任から二年後の明治二四年、大鳥は「蔵輝論」という東洋に於ける日本の外交の在り方について論稿を綴っており、そこでは前述した清国への認識が大きく転換したことが読み解ける。尚、「大鳥圭介関係文書」に収蔵されているものは草稿であるが、この論稿自体は多少内容が縮小されているものの、同年、陸奥宗光外相に送付されている。[20]

ここで彼は、清国との「真実ノ同盟」が東アジアの安全を図ることは地理上、歴史上からも当然であるとしながらも、現今の清国の国情を子細に観察するときに、不利有害である理由が幾つもあると指摘する。

まず、大鳥は「清国本部十八省ハ各独立孤行シテ政務ヲ執リ隣省トテモ綵急相枚ヒ相伝ルノ団結力甚薄シ」と清国国内が政府による統制が出来ておらず、事実上各省が独立した地方分権状態であると言う。故にその具体例として南洋艦隊と北洋艦隊の相互の連携がとれておらずそれぞれが独自の行動をとっていると指摘している。更には、政府の官吏に対し「元来当国ノ人ハ上古ヨリ上下共ニ風水学ニ心酔シ常ニ怪力乱心ヲ迷信シ絶エテ格知ノ理学ヲ知ラス唯古賢ノ経伝ヲ講究スルノミニテ進取ノ志ニ乏シク其内外ノ事情ニ迂遠ナルコト亦驚クニ堪ヘタリ」と厳しく批判し、「若シ是ノ如キ国人ニ結ヒ事ヲ倶ニスルトキハ何時陥穽ニ堕ツルヤモ計ルヘカラス」と日清間の同盟関係には否定的な見解を強く示している。

そして、日本国内の興亜論、東方論を唱えるアジア主義者に対しても、以下のように批判を行っている。

近来世ニ興亜策又ハ東方論者アリ日清ノ協同ヲ説クコト喋々タリ是レ隣邦同文同種ノ間ニ発スル感情ニシテ平日ノ事ヲ処スルニハ利アリテ害ナシ東方ノ貿易上ニハ実ニ必要ノ交誼ナリ雖然国家ノ一大事即チ東方連衡ノ点ヨリ清国ト同盟シ共ニ提携シテ強国ノ南進又東漸ヲ防捍セムトスルハ失策ノ最大ナルモノニシテ深く反省スル所ナカルヘカラス□テ此等ノ浅見ハ畢竟現時近隣ノ国情ニ暗キニ由ルナリ青年輩黄吻児ノ妄言嘆舌以テ之ヲ唱フルハ別ニ歯牙ニ掛クルニ足ラス万一廟堂有司中此論ニ同感ノ人アリ国家ノ政略ニ此主義ヲ含ムコトアラハ神州ノ瑕瑾或ハ此ニ取胎シテ大害ヲ後世ニ遺サム思フテ此ニ至ルトキハ人ヲシテ凛然戦栗セシム[21]

日清間の通商関係の点では、両国の交流は必要であると理解を示すも、清国と同盟を結び西洋列強に対処しようとするのは最大の失策であり、彼らの浅見は現状の近隣国の事情に通じていないためであると強い批判を示した。

以上の様に、清国政府または官吏の数々の欠陥を指摘し、そこから日清の政治軍事面での提携を否定した大鳥であったが、一方で李鴻章の政府内での権力の増長に危機感を覚え、彼の動向を警戒していた節があった。以下が大鳥の李に対する評価である。

本邦人ハ李鴻章ノ職掌権限ヲ知悉スルモノ少ク大ニ其思想ヲ誤ルモノノ如シ李ハ即チ直隷省ノ総督兼会同辨理海軍事務海軍次官ニテ直隷一省ノ政権ヲ掌握シ海軍ニ於テ名コソ次官ナレトモ実は北洋艦隊ヲ進退スルノ専権ヲ有シ且朝鮮ヲ統御スルノ特権ヲ託セラルルモノナレハ真威権甚大ナリ加之同氏ハ皇太后ノ信任厚キナレハ幾々カ中央政府ニ対シ間接ノ勢力有之（中略）若し氏ニシテ中央政府ニ入リ全権ヲ執ルニ至レハ格別此事言フヘクシテ行フヘカ

ラス（中略）氏ヲ以テ日本ノ地方官に比スレハ東京府知事ト神奈川知事ヲ兼任シテ横須賀鎮守府ノ兵艦ヲ統轄シ又陸軍ノ一団ヲ指揮スルモノニ似タリ[22]

大鳥は公使として平素の交際等を通じて李に接近し、ただ親善関係を築くだけでなく、彼の状況を調べ上げていた。清朝内で実質的に多大な権力を誇る彼がやがて清国中枢に本格的に参画した時に日本にとって大きな脅威になり得ると考え警鐘を鳴らした。そして「李モ亦老タリ（中略）李ニシテ死セハ之ニ嗣テ直隷ノ総督ニ任シ且海陸ノ兵権ヲ掌ル人物アルカ是レ一大疑問ナリ」と語っているが、裏を返せば、李個人の強大さをより表す記述となっている。

大鳥は第一章で触れた黎公使との会談の中では日清の同盟による西洋列強への対抗を主張していたが、もはや彼にとって、清国は日本の同盟国という認識は皆無であった。

実際に清国へ駐在し、同国政府の状況を目の当たりにしたことによって、大鳥の主たる対清国認識は明治一五年の「清国論」での認識と比較した時に、脅威から不信へと変化し、それに合わせその戦略を大きく転換させたと思われる。ただ同時に李鴻章個人に対しては大きな脅威との認識を有しており、彼の清朝内での栄進に対し危機感を募らせていたことからも、清国への脅威認識を完全に拭い去ったわけでもなかった。

しかし、同時に大鳥は、同論稿の冒頭で以下のようにも日清関係について語っている。

我国カ清国ニ対スル交誼如何平和ノ時即チ現今ノ交際ニテハ和睦親密ノ隣交ヲ結ヒ上下心ヲ尽シテ疎隔ナキヲ勉メ而シテ東洋政策ヲ実施スルトキニ当リテハ之ト協和同盟スルヲ避ケサルヘカラス是レ即チ和シテ同セサルノ意ナリ[23]

ここから、明治一五年に綴った清国論に連なる大鳥の対清国認識が見受けられる。政治軍事面での協力体制は否定したが、同論稿で「平日ノ事ヲ処スルニハ利アリテ害ナシ東方ノ貿易上ニハ実ニ必要ノ交誼ナリ」と述べたように、平時での両国の通商関係は積極的に押し進めるべきであるとの認識は未だ健在していた。

そして日清戦争の終結後、大鳥は一旦平時の状態に落ち着いた日清関係を鑑み、いよいよ積極的に以上の認識を前面に押し出していくこととなる。

三　公使解任後の大鳥の対清国認識―講演「日清交際の将来」を中心に―

明治二六年に駐朝特命全権公使の兼任を命じられた大鳥であったが、日清戦争の開戦後の明治二七年には公使の職を解任される。詳細は、日清戦争史研究の中で既に語られているため、ここでは端的に述べるに留まるが、その理由は、伊藤博文をはじめとした政府上層部による大鳥個人の力量では朝鮮政府の改革は難しい局面になったとの判断[24]にあった。

帰国後の大鳥は枢密顧問官に任命されるも、それ以降の活躍としては明治三六年の第五回内国勧業博覧会審査総長への就任以外には特筆することはなく、故に評伝等でも公使解任以後の大鳥についてはその記述は極めて少ない。

しかし、公使解任後も大鳥は積極的に東アジア地域に関する論説を発表、講演し様々な行動を起こしていた。本節では戦後日清関係に関する大鳥の論説から彼の対清国認識を中心に分析する。

明治十年代から駐清公使就任の二十年代まで大鳥の対清国認識は、

主として清国を仮想敵国とした脅威論、そして公使時代には李鴻章個人への脅威論は有していたものの、清国政府の欠陥を目の当たりにしたことで日清の同盟関係に関しては非常に消極的な姿を見せた。

しかし前章でも触れたように日清戦争後、彼は積極的に日清提携論を打ち出していくのである。

まず、明治三十年、大鳥は「日清交際の将来」という講演を行っており、以下がその内容である。

明治廿七八年の一戦幸に天祐により勝利の我国に帰し帝国の名声を海外に轟しめたるは望外の満足と謂ふべし此後は上下共に言行を慎み両国間の交際を厚ふし以前に倍するの情を以て心を尽し実意を表すること実に国民の義務と為すべきなり（中略）工業家なり商業家なり今日一般に一個人として銘心すべきこと幾多ありと雖特に清国人に対し善後の交際を温め以前よりも一層親密の信義を表し勉めて善隣の道を尽すべきの秋ならんや善隣の道に政府と政府の間に存するものあり又彼我個人間に存するものあり政府間の交際は自ら専司の官衙あり之に一任し置きて可ならむ（中略）個人間殊に直接に関係ある工業家商業家の今日清国工商人に対し親交を交び実利を得るの条件甚だ多し[25]

ここで注目すべきことは、大鳥は日清政府間の関係性の強化というよりも、両国間の工業家、商業家同士の個人的な関係性を強固にし、そこから実利を得るべきであると主張していることである。

またこの数年後に発表した論説の中でも大鳥は日清間の親交を説くも「両国間の交情を温むるは彼国在勤の公使領事の職務なれども外交形式上の礼儀にて其味未だ全く旨からず」と批判し、むしろ以下のように民間での交流を深めることで利益を得ることが非常に多いとして、民間交流を中心とした日清関係の増進を主張した。

彼国に在るの紳士商民は勉めて彼の上下士人、並に同業者に親しみ、自由に談笑し、又内地人に於ても、本邦の開港場、横浜神戸長崎等に開店の諸商業家に親交を結び、共に相尊敬し相出入し厚情を尽すは一個人の為めのみならず、一は彼人の貿易事業を見習ひ、益を得ること鮮少ならざるべし[26]

また翌三一年には「支那語学を勧むるの説」を講演し、「日本人全体に取り近隣大国の語言に通ずるの今日政事上商務上必要なるは世間衆庶の所認なれども実際之を研究するもの、乏しきは怪訝に勝へざるなり」と批判し、それぞれ各地方の方言の種類の多さを挙げ、「商業家にては上海南京漢口福建広東人に交渉の事務多ければ南音を習ふ方便利多かるべし殊に台湾に関係ある人は福州厦門邊の方言を修むべし」と主張する。この意見も前述したように民間での交流を促進する上で、現地人とのコミュニケーション、交渉を円滑にするために日本人商人の様々な中国語方言の習得は不可欠と考えたのである。

そして、もう一点、大鳥は日清間の民間交流発展の上で、戦後の日本人の清国人に対する態度、認識に対して以下の様に強く注意を促した。

日本人には一種の高慢心を有し昔時より清国人を蔑視するの悪習あり（中略）一昨年なりしが余青山某学校の卒業証書授与式に臨みし時一児童が戦勝の歌を唱へ大に清人の事を毀り豚尾とかチャンとか呼はり一場の喝采を博せり余は之を聴きて一種の感情を生ぜり児童が当時一般の世風に誘はれ謡ひしは無心に出でしなければ素より咎むべきに非ざれども何人が之を教訓せしや其人こそ心無き浅慮の輩と云ふべし戦争の現時なれば上下の人心奮起しおれば左もあるべき次第なれども已に事治りて一年をも経し後なれば思慮ある人は心すべき頃なり（中略）誠に愧入るべき次第なり[27]

大鳥は日本人の清国人への蔑視の悪習の改善と戦争勝利による高揚を戒め、その是正を求めた。これも彼が志向した日清間の民間交流の上で大きな障害となるために強く批判したものであると考えられる。

また大鳥は、日本人と清国人を商業の点から比較し、以下の様に日本人への批判を行い、同時に日本人商人に対し積極的に清国へ出向き、その市場の調査、現地人との交流を行うべきと提唱する。

平素の事業特に商業上にては清国人に及ばざる点頗る多し我見識は敏捷なれども軽漂疎漏にて温厚沈着の質に乏しく気勝ちて力足らぬ姿なり其商業にて彼に譲る所は我は急に大利を摂取するの望を有し彼れは微少より起りて辛苦遠大の利を図り我は売買上約を守るの義心に缺くる所あり彼は此点に於て規約に背くもの少し年来外商が日本商と清国商とを比較して彼を確実として我を軽躁として其優劣真偽を批評する所以なり

（中略）鉄砲玉の戦争には都合能く勝ちたるが是から算盤玉の戦争には油断すると負くることあらむ（中略）仮令戦時の争に勝ちたるも平時の争に負くれば折角の軍功も其甲斐なかるべし（中略）元来本邦人は純悴の商業家と雖清国市場の形勢に迂闊なるもの多し否其事情に通暁することを勉めざるものゝ如し何卒此後上下貴賤とも相誘ふて彼国の内地にも旅行して知友を求め彼の人情風俗を能く観察し我国情形勢をも心を尽し交談し懇に彼我の交誼を結びたきものなり[28]

そして明治三五年に大鳥は以上の講演の集大成として「国民の外交」と題し、以下のように提唱した。

外交に二種あるべし即一は政府の外交是は外務省の対外政略又は政府より派出の公使又は領事が其駐在国に於て経営実施する諸般の事務なり一は国民の外交是は政府の外交と関係なく一箇人又は一会社が外国人民に対し交際を結び通商を行ひ種々の事業を約束し一国の威厳と信用を扶持して永久の国益を謀るを謂ふなり（中略）

政府の外交は表面の礼式にて国民の外交は内面の事実なり事実に敬愛誠実の言行あれば表面の外交を補助証明するの大効あるべし表面の外交十分巧妙なるも国民の相互外交に欠点あらむか一国の品位を崇め国民の徳義を証すること能はさるべし[29]

尚、ここで大鳥が設定した国民は「一般の人民即ち農工商の営業者」であり、彼は政府間の国交ではなく、民間による通商関係の進展に意義を見出したのであった。また大鳥は同講演内で、対外商業関係が盛大になれば、国内で活動する商人も外国語に通ずる必要があるとして「英国語並に支那語北京語、上海語、広東語」の学習を急務と述べ、「清国商業家は言行誠実にて売買の規約に背くこと甚稀なり」と清国の商人事情の説明等、明示はしなかったものの、彼が「国民の外交」の対象国として清国を強く意識していたことが見受けられる。

以上の日清戦争後に展開された大鳥の日清協調論であったが、この認識の根底部分にも戦争前の「清国論」で述べられた「友として之と交るときは、我通商の利日を遂て増殖、実に天下の益友なり」という共通した側面があった。

故に日清戦争の終結によって日清関係が緊張から平時の状態に落ち着いたからこそ、大鳥は積極的に日清関係、主として民間商人同士の交流を説き、通商面で利益を上げるべきと提唱した。これも清国論で述べたように大鳥が清国との通商関係が日本の利益に大きな可能性を有しているとの長らく共通した認識であった。ただし公使として清国政府の凋落を目にしたこともあり、戦後も国家間同士の同盟関係に関しては、ほとんど言及しなかったのである。[30]

おわりに

本論では、明治期の対東アジア外交で活躍した外交官として大鳥圭介を取り上げ、彼の日本の清国との関係性の在り方についての認識について公使時代という画期だけではなく、公使就任前後の時期まで幅広く分析を行った。

本論での検討によって、大鳥は技術官僚等の立場とは別に、日本と東アジア地域との関係性について強い関心を持つだけでなく、自ら積極的に対清国を想定した外交意見や政略を講じ、やがては公使の立場として同地域に赴任しその問題の解決に取り組み、そして公使解任後も、積極的に清国に対する外交意見を世間に向けて発表し精力的に活動を行っていたことを明らかにした。

これは、従来の維新後の大鳥に対する評価が工部省時代、公使時代と別個に固定されたイメージで語られていたことと公使解任後の彼の動向がほとんど分析されなかった状態に対し、それぞれの時期の大鳥を一つの連関した側面から描くことによって、その実像がよりクリアとなったのではないだろうか。

そして、大鳥の清国への認識には、多少の変遷は見られたものの、主軸としては明治一五年に執筆した清国論から連なる共通した認識があった。その後、駐清公使として北京に赴任してからは、清国政府に対し政治・軍事上では軽視の姿勢が見えたものの、日清戦後は長らく大鳥の日清関係の在り様への根源にあった日清通商関係をより強く推進し、両国間の商人等の民間交流の奨励や日本人商人の積極的な中国大陸への進出を促した。

故に対清国認識に関しては、大鳥は一貫して西洋諸国よりも清国との通商関係を重視しており、日清戦争後の積極的な日清の民間での提携を主張したのも、清国論、蔵輝論でも彼が触れたように平時の状況下では、清国を「東方ノ貿易上ニハ実ニ必要ノ交誼」を結ぶべき重要なビジネスパートナーとして見做していたからにあった。

大鳥は日清間の通商関係の進展が日本にとって大きな国益になると認識していた。故にこの関係強化を担う両国民間人の積極的な親善交流を期待し奨励した民間外交論者であったと言えよう。ただし大鳥はあくまでも通商関係を強く意識し、日清間の広義の意味での対外問題への国民の参画には言及しなかったものの、商業面に於いては「国家の発展のために国民が対外問題に高い見識をもち、総力をあげて取り組むもの」[31]という後年の国民外交論にリンクする側面も見受けられる。

大鳥は、日清両国の国民間の通商関係の進展が日本国家発展のための重要な要素と捉えており、日清戦争後には積極的に日本国民に対し、清国との商業上での結合の必要性を提唱したのであった。

一方で、以上の日本の国益を考慮したときに清国政府の存在は時期によって脅威から蔑視へとその意味合いは変化したものの、大鳥にとって対処しなければならなかった大きな障害であった。よって様々な論稿でその対抗策を練りまたは痛烈な批判を行ったのである。

本稿での検討によって、大鳥圭介は、日清戦争史の文脈からの開戦外交を指揮した外交官とは異なる姿を明らかにした。長期間に亘り一官吏として学者として、そして外交官として様々な形で動乱の東アジア地域―特に清国―と長年に渡って関わった人物であった。よって両国の関係性の在り方に腐心した明治期の日清関係を考える上でのキーパーソンの一人としての位置付けができるであろう。

そして、大鳥が志向した日清両国の外交関係の在り方は積極的な民間外交の展開による通商関係の強化であり、両国間の政治・外交・軍

事面での連携はその意味合いは時期ごとに変遷したものの、常時、消極的な姿勢を採ったのである。

注

（1）坂根義久『明治外交と青木周蔵』（刀水書房、一九八五）、佐々木雄一『陸奥宗光「日本外交の祖」の生涯』（中央公論新社、二〇一八）、犬塚孝明氏の『ニッポン青春外交官 国際交渉から見た明治の国づくり』（日本放送出版協会、二〇〇六）等が著名である。

（2）嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』（慶應義塾大学出版会、二〇一六）、中島岳志『アジア主義 その先の近代へ』（潮出版社、二〇一四）、黒木彬文「興亜会のアジア主義」九州大学法政学会『法政研究』七一（四）』（二〇〇五）等。

（3）長谷川精一「森有礼の外交論」長谷川精一『森有礼における国民的主体の創出』（思文閣、二〇〇七）、邱帆「榎本武揚のアジア主義と対東アジア外交」吉川弘文館『日本歴史』（八五一）（二〇一九）。

（4）評伝としては大鳥の遠縁の子孫である福本龍氏の『われ徒死せず 明治を生きた大鳥圭介』（国書刊行会、二〇〇四）が著名である。他に維新後の大鳥を取り扱った研究としては松村茂樹「明治15年出版の大鳥圭介訳「堰堤築法新按」について」土木学会『土木史研究』（一六）、（一九九六）、古林森廣「大鳥圭介の東アジア史論」姫路獨協大学『姫路人間学研究』一（一）、（一九九九）等がある。

（5）高橋秀直『日清戦争の研究』（講談社、一九九七）、原田敬一『日清戦争―戦争の日本史19』（吉川弘文館、二〇〇八）、大谷正『日清戦争 近代日本初の対外戦争』（中公新書、二〇一四）等がある。

（6）邱帆「興亜会のアジア主義と同会日本人会員による対東アジア外交」第九章 大鳥圭介の対東アジア外交（1889～1894）明治大学博士論文 学位授与番号：三二六八二甲第九六二号、学位授与年月日：二〇二〇-〇三-二三。

（7）明治一五年十月十四日付大鳥圭介吉田清成宛書翰 吉田清成関係文書研究会編集・解説『吉田清成関係文書』第一巻書翰篇一（思文閣出版、一九九三）。

（8）明治一五年十月一八日付大鳥圭介井上馨宛書翰（「井上馨関係文書」第二十三冊、資料番号 三七五-五 国立国会図書館憲政資料室所蔵）。

（9）〔大鳥圭介関係史料 明治一五年十月「清国論」〕（小田原市立中央図書館地域資料室所蔵）。

（10）同右史料。

（11）同右史料。

（12）同右史料。

（13）総理各国事務衙門檔案「與日使大鳥圭介論東西大局及修約各事」、朝鮮檔案、光緒十五年八月十六日、（館蔵号：〇一-二五-〇二六-〇二-〇〇四、中央研究院近代史研究所檔案館所蔵）。

（14）明治二二年五月二三日付大鳥圭介吉田清成宛書翰 吉田清成関係文書研究会編集・解説『吉田清成関係文書』第一巻 書翰篇一（思文閣出版、一九九三）。

（15）福本氏の評伝では駐清公使時代は当面大きな難局もなく比較的穏やかに過ごしたとして明治二五年の万里の長城の見物や李鴻章らとの私的な漢詩文交換のやりとりが記述されているに過ぎない。前掲注（4）福本龍『われ徒死せず 明治を生きた大鳥圭介』（国書刊行会、二〇〇四）。

（16）外務省編『日本外交文書』第二十三巻「清鮮両国駐箚本邦公使相互情報交換ニ関スル件」（日本外交文書頒布會、一九五四）。

（17）同右史料。

（18）趙景達『異端の民衆反乱 東学と甲午農民戦争』（岩波書店、一九九八）九一頁。

（19）明治二十三年六月十七日付大鳥圭介大隈重信宛書翰 早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書 三、おお-かと』（みすず書房、二〇〇六）。

（20）蔵輝論 明治二四-二五年 冊子複製版（「陸奥宗光関係文書」第二二冊、国立国会図書館憲政資料室所蔵）。

（21）蔵輝論（駐在公使館罫紙）マイクロフィルム史料 請求番号二一（「大鳥圭介関係文書」、国立国会図書館憲政資料室所蔵）。

（22）同右史料。

（23）同右史料。

（24）春畝公追頌會『伊藤博文伝』下巻（統正社、一九四三）。

（25）大鳥圭介「日清交際の将来」東京学士会院『東京学士会院雑誌』一九巻十号（明治三十年）。

（26）大鳥圭介「清国に対する古今感情の変遷」博文館『太陽』第五巻第十号（明治三二年）。

（27）大鳥圭介「日清交際の将来」東京学士会院『東京学士会院雑誌』一九巻十号（明治三十年）。

（28）同右史料。

（29）大鳥圭介「国民の外交」城重源次郎『東洋學藝雑誌』一九巻第二五二号、（明治三五年）。

（30）明治三四年の『太陽』第七巻第五号の「満州問題」という論説で「吾輩の思ふ所では宜しく日露の開戦を避け支那を警醒して其兵制を改革せしめ以て精鋭なる兵士を養成し日本は其後援となりて露と戦はしめ（後略）」と述べているが、これも日清間の軍事同盟というよりは日本を後方支援にした清国とロシアの代理戦争を得策としたものであった。

（31）酒井一臣『帝国日本の外交と民主主義』（吉川弘文館、二〇一八）。

（本学大学院博士後期課程）